

祝

大村 智先生
ノーベル賞
文化勲章



大村先生は女流画家協会の賞を提賞していただきます。平成19年に大村先生のコレクションを主に展示する葦崎大村美術館を開館、女性画家の作品を収蔵、女性美術家たちの変遷を見ることができます。



メリタ回想
100
F

力まず 緩まず

宮原 麗子



戦後辺り一面焼け野原だった上野が今のような多くの人々が集う文化公園になるとは誰が想像できたでしょうか。私は女流展に出品し続けて64年。洋画家の父、高橋貞一郎（日展、一水会）がパリに渡ったのは私が小学校一年生。船で40日間の旅の手紙が残っている。

現在、次女の宮原むつ美が文化庁の研修員（1994年）でスペインに渡ったのを機に、今秋マドリッドで2回目の女流2人展を企画している。こんなに世界を身近に感じる時代になるとは予想もしなかった。私が85才の今も絵を描き続けられる幸せに感謝。これも女流展に出品し続けられたからである。力まず、緩まず、継続は力なり。

これからの女流展の更なる発展を祈りつつ！

心情の底の方で—— 徳植 久子



描くのが億劫です。構図を決めるのに時間がかかり過ぎ、そのくせ他の事の方に気が逸れてしまうのです。「みんな同じよ」と侮蔑されそうですが、いい作品を発表しなければと、その切望が過剰すぎるみたいです。

描くのが不得意な者の、あまりに無神経な祈りにも似た願いは、かえって私を苦しめ、蔑みます。そんなこんなで何故かこの時期だけ小心になってしまう心は、千々に乱れ、さいなまれ、足掻きもがいて疲れ果て、三ヶ月程は直きに経ってしまいます。

上昇至高皆無の、描くのが嫌いな私、これからは、ただただ無慾に命盡きるまで絵具と共にいられたらと、昨今は願うのみです。

自意識過剰なバカ女の、ヒトリゴトです。



「謀・はかりごと」女流画家協会展60回展（2006年）100 S

第69回 女流画家協会展

2015年6月29日(月) - 7月5日(日)

東京都美術館(上野)

会場は女性の個性豊かで力強い抽象、具象の大作が並び、1週間で総入場者数は10,851名、大勢の来場者で連日賑わいました。公開式のギャラリートークは、出品者と一般の来場者が参加、活発な意見が飛び交いました。

第70回記念展に向けて尚一層、新たに創造、創作して行きます。

祝 吉江 麗子さん

平成26年度 大村文子基金

“女子美栄誉賞”表彰



お知らせ

—— 会期が変わります!! ——

2017年5月28日(日) - 6月4日(日) 東京都美術館

女流画家協会宇都宮展

2015年7月15日(水) - 7月20日(月・祝)

栃木県総合文化センター 2階ギャラリー

県庁前にある文化センターは、大小ホール棟とギャラリー棟に分かれ外廊下で繋がっていて、椽(とち)の大き木が葉を広げ涼しげに木陰を作ってくれていました。

出品者は委員55名、受賞者4名、栃木県出品者13名(会員、会友、一般、賞など)合計72名でした。

初日のギャラリートークは、出品者にとって初めての経験で勉強になりました。小勝禮子栃木県立美術館学芸員、日原公大栃木県文化協会理事の挨拶、また沢山の方々に嬉しい励ましのお言葉を頂きました。

天井の高い整然と作品が並んだ会場風景に来館者から「一点一点の作品が綺麗に見える」と好評でした。



会場入口前外看板



展示会場



ギャラリートーク

女流画家協会 2015相模原展

委員・会員・一般56名による作品展

2016年11月20日(金) - 12月1日(火)

相模原市民ギャラリー

今展は相模原とその近辺及び横浜沿線在住出品者に声をかけ、一般18名、会友17名、会員13名、委員8名とバランスの良い構成で、若手からベテランまで色とり

どりで抽象、具象の作品100号から130号の大作が並びました。一点一点が凝縮して見え、印象的に見える利点があり、本展の会場で見逃したり眼につかなかった作品もあったので、再度の展示は出品者にとって良かったのではないかと思います。

ギャラリートークでは相模原市民ギャラリーの栗城学芸員が一人一人の作品を丁寧に分かりやすく説明し、来場者は熱心に耳を傾けながら作品を鑑賞していました。



展示会場

事務局を終えて—— 第69回展は新しい事を試みとして、搬入を1日にした事、ホームページを充実させ女流画家協会を広く知っていただき出品者が増えたことです。任期を終え、新事務所へ引き渡しました。厚くお礼申し上げます。
(事務局 堀岡正子)

次回開催 「第70回記念女流画家協会 相模原展」 2016年11月4日(金) - 11月15日(火) 相模原市民ギャラリー



《大村文字賞》

「定点の死角」130 F、「無意識」100 S

松山 美生 (一般・神奈川)

私はモチーフとして壁面にガラスを多く用いた建築を取り扱ってきました。ひとつひとつが複雑に反射と透過を繰り返して、現実世界をその平面の中に閉じ込めています。最初にコンプレッサーを使って大まかに色彩を付け、その上に線描で形を作ります。130号の画面では明るすぎないようにグレーゾーンを多くして明度を落とすのに苦しみました。室内と外をつなぐ豊かな空間に、時の流れを画面にきざむ——このテーマは4年前から取り組んでいるのですが、追求していくうちに変化していくこともあるのではないかと考えています。(辻井・西田)



《ホルベイン工業賞》

「Yomi」130 F

菊地 笛子 (会友・栃木)

私の住んでる那須の自然(林)と、2年前に他界した祖母への思いを、私が好きなバラの花の中に描き込みました。テンペラと油絵のグラッシーの混合技法です。まず、キャンバスに箔を張り、オイルバーで下がきをし、テンペラで細かい部分を描きました。人は何処からきて何処へ行くのだろう。そんな思いと陰府にいる祖母へ手紙をかく思いで描きました。折りをテーマに生きていく中で感じた、ありのままの気持ちを自分の中で描き続けたいと思っています。この賞を頂いて祖母から返事をもらったようでとても嬉しいです。(辻井・西田)



《マツダB賞》

「変容(A)」100 F、「変容(B)」100 F

金井 隆子 (一般・東京)

透けるほどに薄く柔らかな和紙(書でかき損じた)を、水の中でペースト状に戻し、墨の濃淡を利用して染める。接着液でキャンバスに1cmほどの厚さに貼り込んでゆきます。

展開として変四角に切り出した板に、ペースト状を貼り込み、乾燥させたパーツも組み合わせ、その上に小さく切った金属片を散らして構成しました。

主体は紙です。柔らかな和紙が画面の中で塊となった時、無機質なコンクリート面と見まがうほどの変質、変化=変容に興を引かれ、取り組んでみました。

(辻井・西田)

インタビュー画ガール



《世界堂賞》

「豊穡の慶び」100 F

村上 富子 (一般・静岡)

東日本大震災の被災地の方々の復興に向けて歩む力強い精神に少しでもお役に立ちたい思いと、豊作の頃を思い出し、希望に向かって頑張りたいとの願いを込めて描きました。

制作中は働く人の自信に満ちた力強い手の皺から、そのご苦労や努力、頑張りに感謝する気持ちで描きました。

今回女流展に初出品し、受賞することが出来、大変嬉しく、今後の制作の励みとなりました。これからの絵のモチーフも心の中に希望や力強さ、感謝等々のメッセージを込めた明るい絵を描きたいと思っています。(岡崎・原)



《奨励賞》

「ひみつの基地」100 S

松原 紀子 (一般・静岡)

保育の場を離れてからも、私の中に残る子供達を主題に描き続けています。生命の原理、育ち行く自然の力、それを見守る喜び、その先に待っている未来に夢を馳せつつ。この作品は近くの台風一過の海岸で無心に遊ぶ子供達に出会った時、そのエネルギーを絵にしたいと思いました。今回の受賞及び会員推挙は、私に大きな励ましを下さいました。これからの制作は今にも増して、子供達が見て楽しめるような、その心理に近づいて、心象を表す色彩を配することで、イメージの再構築を試みていきたいと思っています。(岡崎・原)



《奨励賞》

「叢(そう)」130 F

餌取 紀恵 会友・富山

以前より水墨画に興味があり、何とかそれを油彩で表現したいと思い、その為のマチエールを数年かかって試行錯誤しながら制作してまいりました。モノクロは表現の仕方によっては華やかなカラーに負けないインパクトが出るのではと思います。モチーフは樹木や草等の自然の造形がもたらした偉大さ、バランスの良さに魅了され、なかでも見過ごしてしまいそうな草叢。巨木の木漏れ日に照らされた様々な形の葉が、仲間たちの邪魔にならない様に、しかも自らを精一杯主張する姿に感動し、今後この美の追求に励みたいと思っています。(岡崎・原)

女流画家協会研究部は、銀座ギャラリー青羅にて第1回作品展を4月に開催しました。限られた壁面で希望者全員に出品していただく事は出来ず、熱心に研究会に通っていた部員36名で構成する事になりました。

1人1点20号以下、10号は縦・横自由、それ以上は縦



で縁なし、又は細縁と限定しましたが、かえってスッキリとした展示にできたと思います。搬入当日はどんな作品が並ぶか心配でしたが、一生懸命に自分の世界を追求した具象、抽象の油彩、水彩、日本画、パステルなど女流展で見るとは一味違った自由な表現の作品が並びました。

部員の方達も陳列、会場当番など積極的に協力して、いつもの研究会とは違った交流ができ、お互いに理解し合う良い機会になった事でしょう。刺激し合い、次への制作意欲につながっていったらと思います。

(研究部 松本恵美)

追悼 前田 さなみさん ご冥福をお祈りいたします

前田先生とは30年の長きに渡りお付き合いさせて頂きました。「ギャラリー神宮苑」の20年間は毎年「ル・シュマン展」「私の風景展」、その間14年間「女流画家協会委員小品展」をご一緒し大変楽しく懐かしい思い出となっております。

信州のスケッチ旅行の折も天候に関わらず、熱心に描いていらっしゃる姿やお好きなワインが入り皆と絵や旅行などの話が弾み楽しい事がありますと嬉しそうに「やったネ!」と仰る姿は今でも目に浮かびます。お仲間、お弟子さんを大事になさるお洒落で優しい素敵な先生でした。

今はそのお姿もなく作品も拝見出来ず寂しく残念でなりません。ご指導いただきました数々の事を感謝しこれからもしっかりと描いていく事が一番喜んで下さる事と存じます。

(服部圭子)

わが師 前田さなみ

私は17歳の時、大きなチューリップの花の向こうに、青い空が広がっている作品を制作していた頃の前田さなみに師事しました。その後長男と結婚したので、私の義母となり20余年同居していましたが、義母が絵筆が持たない日はありませんでした。

国文学者であった義父の前田金五郎が、ハーバード大学に招聘された一年間、義母は70年代のアメリカに暮らし、ここで大きく作風が変わりました。見透せぬ窓という題名も義父がつけたもので、晩年の義父の著作の表紙を義母が描き、嫁の私から見ると二人暮らしは面白いものでした。

私は退職後、イタリアに留学して工房で昨年からフィレンツェで学びました。制作途中の写真を添えて、義母にメールを送り続けたのですが、22金貼りテンペラで描いていくアイコン画の制作をとっても楽しみにしてくれました。ところが義母は入院してしまい、何度か帰国しようかと相談したのですが、帰って来ないで勉強を続け、展覧会にも出品するようと言われてしまいました。

私は搬出の次の日帰国し、そのまま義母の病床に向かいました。義母と私は、病室で抱き合って泣いてしまいました。それからわずか3週間でしたが、毎日長い時間、以前のように私たちは絵の話をして過ごしました。アイコン画を持っていったら、絵に関しては本当に厳しかった義母が、初めて「良くできました」とほめてくれました。私のテンペラ画の制作途中の写真を見て、義母ははしゃいで、「今度の作品決めた、このイメージで描くわ」と言いましたが、そのまま帰らぬ人となりました。義母が最後に描こうと思った絵はどんな絵だったのでしょうか。

(前田礼子)

故 前田 さなみ 画歴

- 1930年 東京都生まれ(先祖、父母は七尾市の出身)
 - 1952年 金沢美術工芸短期大学 洋画科卒業
 - 1969年 女流画家協会展「O氏賞」受賞
 - 1971.72年 女流画家協会展「バラ賞」受賞
 - 1988年 独立美術協会展で「独立賞」受賞
 - 2010年 「見透せぬ窓 前田さなみ展」(石川県立美術館)
 - 2015年4月3日 逝去(84歳)
- 女流画家協会委員、独立美術協会会員



「窓」227×182(1983年)、第51回 独立美術協会展出品、石川七尾美術館収蔵

《追悼》
心よりお悔やみ申し上げます

青木純子さん(90歳)
2016年1月5日 逝去

南島宏先生(58歳)
(女子美術大学教授)
2016年1月10日 逝去

徳植久子さん(84歳)
2016年4月7日 逝去

編集後記

巷には悲しいニュースがあふれています。そんな中であってこの紙面で、祝、おめでとう! という言葉が使えたことに女流の一員として誇りを感じます。ほんの小さな喜びが大きな輪になりますように。(Y)

女流画家協会 会報 vol.4 - 2016.6/29

発行日: 2016年6月29日
発行: 女流画家協会

編集委員:(委員)上條陽子、吉川和美、
(会員)岡崎好江、辻井久子、西田亜佐子、原絢子

女流画家協会事務所

中村智恵美方
〒210-0024 川崎市川崎区日進町1-2-307
TEL・FAX: 044-272-5200
http://joryugakakyokai.com